コミュニケーションにおける「直接性」－恋愛と発話行為－ 'Immediateness' in communication

芦 川 晋
ASHIKAWA Shin

Regardless of others' understanding, we can have any 'emotion' or 'feeling' about others and also make use of them to construct some relationship between others, which could not be supported by people outside of the relationship. Of course, this relationship is not based on direct communication as someone says something and the other understands it. But it is an *immediate* and *intimate* one based on 'emotions' or 'feelings'. In this paper, love is picked up to show the function of 'emotions' or 'feelings' and the structure of immediate relationships. In the course of investigation, Speech-Acts Theory by J. R. Searle and love as a generalized symbolic medium by N. Luhmann will be referred to.

1. はじめに

コミュニケーションに焦点をあてて社会関係を観察するとき、互いが互いのことをどこまで理解している（とみなされる）かどうかには注意を払うことはあっても、どこまで互いが互いのことを理解しなくてもかまわないかを省みることは少ない。だが、ある種の「感情」や「感じ」に支えられていると思われる関係がある。「感情」や「感じ」は各人が各様に抱くものでそれを互いに確認しあう必要はない。つまり「感情」や「感じ」は相互理解とは独立して機能する。にもかかわらず、それを参照して相手との関係を構築することができる。いわば「感情」や「感じ」を抱くことは相互理解を必要としないコミュニケーションなのである。本稿のねらいは愛を打ち明ける場面に焦点をあてることで、「感情」や「感じ」に依拠した相互関係の構造を取り出してみることにある（これを後に「関係の直接性」と表現する）。なお、本稿で愛を取り上げるのはこうした特別な視角においてであり、いわばコミュニケーションとしての恋愛が主題である。それ故、本稿は愛の問題をすべて論じ尽くしたものとは到底言えない。だが、愛について考えるための有効な図式を一つ示したことになるのではないかと思う。

我々は互いに自分以外には知り得ないような「内面的な」領域を持つものとして互いの関係を築いている。これは、実際に内面なるものが存在するということを確認しているのではない。純粹に内面的な領域なるものがあるとするなら、そもそも内面があるとかないとか他人が議論すること自体が無意味になる。我々は自分の内面について語ることで他人の理解を得られるし、他人の内面について推論することができる。つまり内面とは各人が関係する上で互いに参照できる公的な資源であり、決して個人が隠匿しているようなものではない。例えば、私秘性privacyがしばしば自分の部屋のような空間として表象されることを想起してみよう。そこは他人が立ち入ってはいけない場所なのかもしれないが、空間と

して表象される限り可能的には誰もが入って行ける場所なのである。このように内面のもつ特殊性とは、内面そのものの持つ特質ではなく、内面をめぐる態度・語り方をめぐって生じていると考えることができる。つまり、他人の内面と自分の内面について異なる態度をとることが一般に許されていること、あるいは他人には知り得ない自分だけが知りうる内面を有するかのように語り・振る舞えることこそが注目されなければならない。

本稿ではこうした内面をめぐる態度を検討の対象にして愛を取り扱う。こうしたアプローチを採用する限り経験命題の定立とその検証という実証的手続きは役に立たない。態度・語り方を取りだす試みは我々が日常そうしている実践を反省的に観察可能にしようとする実践に他ならず、その妥当性をめぐる評価はこの議論を通じて観察を行うであろう各人の実践に委ねるしかないからである。だから、ここで必要なのは我々にある種の態度・語り方を可能にするような図式を観察の道具として取り出してみせることである。そこで、ここでは次のような方法論的立場から議論を試みることになる。すなわち、一般的・抽象的な図式とその機能を論理的に構成しその有効性を実演してみせることで、それを各人に解釈の道具として提供する。各人おのおのがこの図式を利用して実践を観察できることにより、この図式の想定が一定の有効性を持つことの証にする⁽¹⁾。と同時に図式を採用することで個々の実践の把握を越えた現象の連関性が示されるよう試みる。

それ故、この図式はその由来にも関わらず観察者が任意に利用できる性質のものではないということも分かる。観察者はこの図式を利用して観察を行っているのだが、そうして観察されるのは行為者による図式の利用である。つまり図式の具体的な利用は観察者から独立した行為者の実践として把握されるのである。だが、観察者自身を観察すればやはりそのような図式の利用者として観察される。こうした図式の機能は図式の道具としての有効性への期待や批判の可能性をも与えることになる。

議論は次のような手続きを経て進める。まず、愛をめぐるやりとりがどのような態度を伴っているかをサールの発話行為の理論との対比でとりだしてみる。しかし、サールの理論はその構造からしてこうした態度を十分に捉えることはできない。そこで、次にルーマンのコミュニケーション・メディアとしての愛の議論に解釈を与えながら愛をめぐる態度を図式としてとりだし、愛を通じてできあがる関係の構造を示してみる。その結果、愛のような内面に依拠した関係は、互いの間で積極的に確認することはできないが、互いの親密な結びつきを感じさせる（関係の直接性）関係として観察できることを明らかにする。私見によればこの種の関係は社会的に極めて重要な役割を果たしており、理解（コミュニケーション）の次元では決して明らかにならないものである、

2. あなたの気持ちはうれしいけれど---

相手のことを好きな自己（愛する側）が相手（愛される側）に愛を打ち明けて互いに思い思われる関係を作り出そうとしている場面を想定しよう。ここではさしあたり対面的な状況を思い描いているが、状況は電話上でも、手紙上でもかまわない。このような関係を作り出し、それを維持していくために自己が達成しなければならないのはどんなことだろうか。また、そのためにどんなことを自己は利用できるだろうか。

互いが愛し合っているということはしばしば互いに分かりあっている、通じあっていることと重ねられる。そこで、まず理解することと愛することの結びつきを考えてみる。サ

ールは発話行為speech actsというアイデアをコミュニケーションの理論へと発展させた⁽²⁾。サールのモデルによればコミュニケーションとは発話者の意図を相手に理解させることを通じて相手との間に一定の関係を作り上げることである。だから、愛を打ち明けることがサールのいう意味でコミュニケーションであるのなら、サールの理論を使って事態を説明できるはずである。さしあたって必要な概念を確認しておこう。

サールはオースティンにならって発話の理解を達成する機能を発語内行為illocutionary actsと呼び、他方で意図の伝達とは別に発話から生じてしまう言語上の効果を発語媒介行為perlocutionary actsとして区別する。この発語媒介行為の効果は発話者の意図したものでも意図しないものでもよいが、相手が発話者の意図を理解する必要がないという点で発語内行為とまったく異なる。例えば、私がある女性に結婚を申し込んで、相手がそれに驚く。この驚くことは発語媒介効果に属する。このとき私が相手を驚かせようとする意図することは驚かせる効果と必然的に結びついていない。かえって、驚かせようという意図が分かったら相手は驚かないかもしれない。しかも、相手が驚くかわりに喜んだり泣き出したりする場合も考えられるように、この効果と発話の間に一義的な対応関係はない。しかし、発語内行為ではそうはいかない。申し込みは受け入れるか拒むしかない。相手は発話者の意図を理解し、そのことを示す形で答えることになるからである。なお、ここで確認しておくで発語内行為で求められているのは申し込みを受けるか/受けないかであって、実際に結婚するかどうかではない。結婚したりしなかったりすることは結婚の申し込みの有無に関わりなくできるのであり、結婚そのものは発語内行為から独立している。それ故、実際の結婚は発語媒介行為に属することになる。ただし、そのつながりは規約的に保証されたものとみなされる。

「愛してる」と打ち明ける行為が発語内行為であるかに見えるのは、「愛する」という動詞が行為遂行動詞performativeのように一人称と二、三人称で異なる振る舞いをするからである。

1: 「彼女があなたを愛している (と報告する)」

2: 「わたしはあなたを愛している」

1は単なる報告にすぎないが、2を報告と解釈することはできない。「結婚して下さい」と口にすることがまさに結婚を申し込むということに他ならないように、自己が「愛してる」と言うことこそが愛していることを示している。つまり、2は1と違って何らかの事態を確認・報告しているのではなく、この発話行為自体が「愛している」という事態の構成要素となっているのである。こうした違いは二つの発話の取り扱いからも把握できる。

1に対して「分かりました」と答えたりその真偽を論じることはごく自然な応答であるが、2によって求められているのは分かったという返事ではない。断りの常套句として「あなたのお気持ちは分かりました。でも――」という文句を用いることができるように、2は単に自己の気持ちを報告すること以上を意味するものとして扱われているのである。つまり、愛を受け入れるかどうかという選択が相手に暗に期待されている。

しかし、こうした用法は相手側の愛を受け入れる/受け入れないの選択図式が発語内行為の効果として採用されるわけではないことも示してしまう。既に述べたように、結婚の申し込みを理解したことにするにはそれを受けるか受けないかという形でしか応答するしかない。つまり、受ける/受けないという図式を相手が採用できることが理解したということ

であり、かつそれに尽きる。しかし、2の場合相手は言われたことを理解した上でさらに選択する余地を手にしているのである。愛を受け入れるか/受け入れないかは理解することと独立させて扱うことができるのである。

この点は愛を打ち明ける上でしばしば状況がものを言うことからでも理解できる。愛を打ち明けるとき花束を用意するとか、場所はドライブ先のヨコハマ・ベイ・ブリッジがよいだとか、特別な状況をしつらえることが効果を促進することがある。これは求めている効果が単なる発話の意味の理解から独立した発語媒介的なものであることを示唆する。極端なことを言えば自己は「愛してる」と打ち明ける必要すらない。相手が勝手に自己のことを好きになって「愛してる」と打ち明けてくれればそれで願ったりかなったりなのである。愛を打ち明けることをめぐるやりとりから相手の選択が問題になるとしても、それは発語内行為ではなく発語媒介行為によるのである。

さらに、発語内行為では誰かに何かを「依頼」したり「約束」したりする自己の選択の幅を含んでいるのに対して、「愛してる」はそうした選択の余地がないとみなされている⁽³⁾。愛する相手は誰でもよいというわけではない。愛しているのは他にいくらでもいる男/女の一人ではなく他に代えがたい「この人」なのである⁽⁴⁾。相手がいくらでもいる他人と変わらないと感じ始めたときに愛は終わる。また、意識しないうちに自分の振る舞いが相手への思いを示してしまうことすらあるように、愛してる側はどうあっても相手のことを愛しているのであって、愛しているということ自体選びようがない。「愛している」ということは、こうした選択の余地のない状況下で口にするものとみなされるから、用事を思い出して依頼や約束を取りやめるように簡単には取り消せないものとして扱われる。他方、「愛してない」は自己が相手を愛しているかどうかを問題にできる状況を想定してはじめて話題にできる。だが、相手にそうした状況を現前させるために「愛してる」と口にするのだ。自己は「愛してる」を選択するように「愛してない」を選択することはできないのである。

だが、相手の方はそうした自己の愛を受け入れるか/受け入れないかを選択できる。自己がいくら愛の証を示しているつもりでも相手がそれを愛の証として受けとめてくれないといった事態は、容易に見いだすことができよう。もちろん自己の方も愛を示すのにどれがベストかは選択できるし、愛の普及における文学の役割がしばしば指摘されているようにそのためのマニュアルはいくらでも参照できる。しかしそれを受け入れるかどうかは眼前の相手次第なのである。「愛していると言ってくれ」という頼みは「はい」とか「いいえ」で答えられるものではない。愛を打ち明けるについて選択の権利は打ち明けられる相手側にのみ有り、打ち明ける側が選択することはできない⁽⁵⁾。この発言は選択する権利が相手にあるということを公にしているにすぎないのである。

愛を打ち明け愛し合っている関係を作るためには、まず相手に愛を受け入れる/受け入れないという選択図式を採用させなければならないが、それは発語内行為の機能を越えた発語媒介効果に属する。他方、愛する自己には相手を愛する以外の選択の余地はなく、自己と相手の間には非対称性がある。図式はここで確認してきた状況を捉えるものでなければならないが、それは発話行為論の能力を越えている。次節ではルーマンの議論を解釈しながら、こうした特徴を包摂する図式を描いてみる。

3. 相手を口説いているとき口説くことによって相手を落とそうとしているが、相手が落ちたとき口説いたことはその原因であってはならないということについて

ルーマンによれば、愛というメディアは愛する側の行為が愛される側の体験へと接続されることである。ここでいう体験と行為は複雑性を縮減する二つの形式のことであり、体験では特定のシステム（自己）ではなく世界（他者）の選択として複雑性が縮減され、行為では特定のシステムの選択として複雑性が縮減される。当面の議論としては、ある出来事の生起が当事者の意図に基づくものとみなすことができるか否かで、行為/体験が分かると理解しておくことにする（もちろん、ある出来事が体験として特定されるか行為として特定されるかはその出来事の記述によって異なる）。こうしたルーマンの議論はこれまでの我々の検討と重ね合わせて理解することができる。

愛は内面性の領域に属するものであり、自己には操作できない自然に湧きおこる感情 *emotion*、*passion* の一つとみなされている。「愛する」という動詞は基本的に「愛してる」と進行形で用いられるように愛している気持ちは打ち明ける行為からは独立してそれ以前からあるものとして取り扱われている。かといって「愛してる」の始まりに「愛する」という能動的な契機があるのではない⁶⁾。前節で確認したように誰かを適当に選んでコイツを愛そうというわけにはいかない。それどころか感情の過度の高まりは「我を忘れ」させる。感情は個人の制御を超えたものとして取り扱われているのだ。愛とは受動的 *passive* なものであり、自らの意志に関係なく或る日突然にわき起こる「愛している」感情として、つまり体験として観察されるのである⁷⁾。

さきほど「愛してる」と打ち明ける側は愛する行為以外の選択を極めて考えにくい状況にあることを指摘した。これは愛していることが感情の一つとみなされていることから説明がつく。感情は自己には選択のできない体験とされるのであり、それを示す行為もそうした感情の一部として、それ以外には選択不可能な行為として遂行されるのである（もちろん、愛しているふりをすることができるし、ここで言う感情がそのようなものであることに注意して欲しい）。

愛する行為は相手が愛を受け入れること、つまり同じように自己を愛する感情・体験と結びつくことを期待してなされる。ここから発語内行為の次元においてなぜ愛を打ち明けることが説明できなかったのかが明らかになる。サールは発語内行為の成立を聞き手による発話者の理解として説明しているが、その理解が話し手に示されるのは聞き手が発話者の発言（発話行為）に対して適切な行為を接続させたときである。特定の発語内行為として機能する発言に後続できる発言は任意ではない。発語内行為は自らに接続可能な選択肢を指示している（結婚の申し込みと、それを受けるか否か）。つまり、発語内行為の成立とは、ある発話行為が次に接続可能な発話行為（あるいはそれに類する行為）の一群の選択肢の中のいずれかに接続されたときのことを指すのであり、このような発語内行為の力能が「発語内の力」である⁸⁾。いいかえれば、発語内行為は（発話）行為間の接続関係を制御する営みであり、体験を直接制御することはできないのである⁹⁾。

このように「愛してる」と打ち明ける行為は相手の体験を志向しているため後続する行為を指示できない。このことは例を見た方がわかりやすい。自己が相手に「愛してる」と打ち明けて相手が「私も愛してる」と答えても、それが自己に強要されたり同情して応じたものであることがはっきりしていれば本当に「私も愛してる」と応じたことにはならな

い。行為する側は自己の行為によって相手から「愛してる」ということばを引き出そうとしているが、そのことばは自己の行為から独立した相手の体験に由来する自発的なものであり、相手がその気になっていると判断できなければならない。つまり、自己の行為は相手の行為を期待してなされるのだが、そうした相手の行為が体験を表示するためには自己の行為が相手の行為を可能な選択肢として指示してはならないのだ。いいかえると、自己の「愛してる」という思いを相手が発語的に理解しても、相手はそうした理解とは独立して「私も愛してる」と返さなければならない。このように相互の理解とは無関係とみなされるところで関係が出来上がるため、「愛してる」と打ち明けてめざす結果は発語媒介的な効果に属することになるのである⁽¹⁰⁾。

しかし、相手の行為が自己の行為から独立したものでなければならないとすると、次のような困難が生じる。つまり、自己の行為から独立した相手の行為はいくらでも見いだすことができる。相手の行為と自己の行為の繋がりはどのようにして見いだされるのだろうか？いいかえれば、「私も愛してる」のようなはっきりとした返答が得られなくても、相手の行為を「愛している/愛していない」のいずれかとして把握できるのは何故だろうか？

実はそれが「愛している」からなのである。振り返ってみると我々は誰かが誰かのことを愛していると分かれば、大抵その誰かの方はこの誰かを愛しているかいらないかのどちらかだと考える。つまり、愛される方が愛する方に何らかの感情を抱いているかどうか分からないのに、愛する方の感情に対応させて愛される方の感情を「愛してる/愛してない」と図式的に主題化している。このように自己は自分が愛する限り相手は自分のことを愛しているか/いないかのどちらかだと期待することによって、相手のいかなる対応もこの図式の枠内で把握することができるのである。逆に、相手に「良いお友達でいましょう」と言われてもそれを字義通りに受け取るのが難しいことになる。愛することが単なる感情ではなくこのように期待の構造を組み込んだ図式としてとして一般化しているので、我々は「愛する」ことの「困難」を自覚することがないのである。

こうして打ち明ける側の行為を打ち明けられた側が愛される体験として実際に処理したとする。そうすると、今度は打ち明けられた側が新たに打ち明ける側として最初に打ち明けてきた側の体験に志向して行為することになる。つまり、今度は打ち明けられた側が「愛してる」以外の選択肢はなく、相手に「愛してる/愛してない」の選択肢が与えられたものとして行為することになる。これは相手の告白を受け入れてしまうと今度はそれを本気で言っているのかどうか疑うことができるといったことを考えればよい。もっとも最初に相手が「愛してる」と言ってきたのだから、相手は自己の愛する行為に対して「愛してる」と応じる可能性はより高いものと期待することができるだろう。このような関係の進行として愛が進展することになる⁽¹¹⁾。

さて、以上で一つの解釈図式を採用することで愛がメディアとして機能する様を確認できた。自己の行為を相手の体験への期待と結びつける図式を採用することで理解とは独立に二人の間が媒介されるのである。このようなメディアの機能は、互いが愛のような感情(体験)を帰属する内面性の領域を確保し参照できることに結びついていることが分かる。なぜなら、愛というメディアは「愛している/愛していない」という互いの内面的問題を図式化して社会的に把握可能なものとすることで機能しているからだ。内面は社会関係に利用可能な資源なのである。ここまで我々はそのような資源を用いてそれが社会的な資源と

して機能することを示してきたわけである。

4. わたしが今何かを隠していることをわかってください

こうしたメディアの機能を通じて「親密な関係intimate relationships」が形成される。ルーマンによると親密な関係とは「人と人との相互浸透interpersonal interpenetration」のことであり、「親密さが生じるのは、ある人のパーソナルな体験の領域やある人の身体行動が相手の人にとって、ますます理解可能になり、重要性をおびることになり、自他の立場を変えても同じことが言える場合である」[Luhmann 1984:304=354]。先に見た図式を採用することで親密な関係が顕著に強化されることが分かる。

相手の体験処理は図式的に「愛してる/愛してない」と把握されるから、いずれにせよそうした相手の体験はそのまま自分の次の行為に影響していく。相手の微笑が客への愛想笑いではなく自己を「愛している」からかもしれないとなれば、それだけ相手のすることが自己にとって重要な意味を帯びてくる。図式の採用により相手の振る舞い・体験がますます自己にとって重要で把握すべきものになっていくのである。そして図式による相手の体験の把握は行為の接統関係では得られないような直接的immediateな結びつきを与え、二人が余人に代えがたい特別な間柄であることを感じさせてくれる。また、こうした関係の進展に寄与するために自己の内面により結びついていると思われる事柄・秘密を相手に明かしていくことが意味を持つし、とりわけ性的な関係を結ぶことが二人だけの関係を強化していく（面白いことに性的な関係を結ぶことはしばしば相手を「知る」として表現される）。性的な関係では互いの身体的共存以外の要素に頼ることなく関係を作り上げていくことができるから、行為と体験のつながりをより直接的なものにしていくのである。

もっともこうして生じる関係は、行為間の接統およびそこで生じる関係に比べて極めて不安定である。なぜならこのとき相手に対する期待は相手に「愛してる/愛してない」という選択肢を帰属させても相手による「愛してる」の選択を強化することはできないし、相手との結びつきも図式や行動を通じて把握された相手の体験によるのであって、相手の体験そのものの把握によるわけではないからである⁽¹²⁾。相手との関係を支えているのは、互いの理解（発語内行為）とは別個の図式の採用、言い換えるなら自己が一方向的に抱いている思いこみ・感情なのである。

この点で対照的なのが結婚である。結婚は愛によって結ばれた二人の関係を社会的に承認された所有・契約関係へと変換する⁽¹³⁾。しかし、結婚は当事者間の愛によるつながりが必要としないし、またつながりを強化できるとも限らない。結婚は宣言型の発語内行為によって実現されるが、こうした社会的に画定可能な二人の関係から二人の感情的な結びつきは抜け落ちてしまう。既に見たように愛による結びつきは相互理解とは独立したところで扱われる発語媒介的なものなのである。だから、愛によるつながりは公共化・顕在化することができない。そこで、いくら相手が「愛してる」と言ってもそれが信じられなかったり、いくら嫌われても「本当はオレのことを好きなんだ」と勘違いする人間が出てきたりすることになる。あるいは、相手との結びつきは単なることば以上のものとして表現される。愛にあっては常にコミュニケーション不可能性がついてまわるのである⁽¹⁴⁾。

そして、愛による結びつきを確認するために参照されているのが、行為として把握できるかどうか曖昧な領域にある相手の振る舞いである。先に述べたように愛は個人には操作

できない自然的な感情（体験）として扱われている。この感情に対応するとみなされる振る舞いは体験処理を通じて生じるものとみなされているから、当の感情とまったく関係なく生じる振る舞いに比べて随意的であるが、意図的になされる行為に比べて非随意的であることになる。こうした非随意性は語調、しぐさ、相手との距離、前後の相手の言動、手紙ならレトリック、さらには相手の過去、自己のために払ってきたと思われるコストなどから読みとられる。その多くは身体と結びついていた、非言語的なコミュニケーションに属するものだが、それに尽きるわけではない。

例えば、自分のプレゼントした指輪を相手がはめてこなかったとする。これは、単にはずしたまま忘れているのかもしれないが、それは自分に対する愛がさめているせいかもしれない…。もともと曖昧な領域を見ていることになるからいずれとも判断しがたい。といって、相手を問いただして答えを得ようとしても、そもそも発語内的な理解では確認できないから悩んでいるのだ。こうした振る舞いについて愛してる/愛してないを判断するために相手からさらに参照できるのも結局そうした振る舞いなのである。そのため、これらを判断の材料とすることも確実な根拠を与えることにはならず、かえって関係の不安定性を高めることにもなる。相手のことは自分が一番知っているはずなのに、その相手のことが分からなくなるのである。

そこで、しばしば複数の判断が自己の中に混在することになり、「統一された自己self」は分裂する。例えば、「外で雨が降っている、だが私はそれを信じない」と言うことはできないが、「彼女は私を愛していない、だが私はそれを信じない」と言うことは許されているように思われる。そして、こうした自己の分裂は一時的な異常として取り扱うことが社会的に許されている。愛は病気などのメタファーで語ることができるのである[Luhmann 1982: 31=26]。他方、こうした自己の分裂は愛の証として再びコミュニケーションに導入することができる。「こんなにもあなたのことを思っています」、と。

また、「真実の愛/虚偽の愛」といった二分法もこうした蓋然性に対処するために導入された形式である。既に述べたようにいったん愛を受け入れると常に自己は「愛してる/愛してない」の選択肢を相手に帰属できるようになるため非常に不安定な立場に陥る。そこで二人の関係を所与のものであるかのように利用してこれに対処することができる。互いがこの「関係」を維持しようとしているかいないか、互いの愛が「真実か/偽りか」を主題化していくわけである。「私を本当に愛しているならこんなことはしない」、「愛しているからもう会わない」。これにより互いが愛しているかどうかから、互いが愛しているならどうすべきかへ関心の焦点が移っていく。この時自然的な感情とみなされていた愛は、同時に関係を維持する上で主体的に操作可能なものとして扱われることになる。つまり自然的な感情を適切に維持し相手に示していくことが求められてくるのである。といって感情の適切さは自己に操作できるものではない。その評価は体験としてそれを受け入れる相手に委ねられている。親密な関係を作っていくためにはそうした相手の体験の独立性を尊重し、関係の継続性を必ずしも期待できないまま関係にコミットしていくことが必要になってくるのである⁽¹⁵⁾

5. 関係の直接性

さて以上で図式とそれが可能にする愛のメディアとしての機能、さらにそれを通じて形

成される親密な関係の特徴について見てきたことになる。この図式を採用することで愛のような感情が社会関係の構成に組み込まれていることが観察できた。こうして見るかぎり、非合理的なものとして残余カテゴリーに放り込まれてきた感情が実は社会関係のなかで合理的な機能を担っていることが分かる。他方、愛という図式（感情）を組み込んだ関係は相互理解をもたらすコミュニケーションでは作り出すことも確認することもできないような関係であった。行為の直接的directな接続関係はなくても、各人が図式を採用することでより直接的immediateで親密な結びつきを作っていくのである。ここでは、このような顕在的・公共的には確認できないが図式によってその生起が推論されるような関係の質を「直接性immediateness」と表現することにする。それは発語内行為によっては実現されず、発語媒介行為（あるいはそれに類する行為）によってのみ達成される関係であり、その特徴は関係の構成に参照される内面性の特質に類比的である⁽¹⁶⁾。直接性の関係は、互いに公共化できないような「内面性」と結びついた情報があり、それを互いの公共化できない関係を作るのに利用できるということを互いが知っているときみなされる状況において可能になる。

もちろん相互理解の達成にあって意図の参照可能性が中心にあり、我々が相手の意図を感じとれるときみなされる限り、あらゆるコミュニケーションは程度の差はあれこうした様相を帯びたものとして観察できる。我々が自己の振る舞いに対して相手から何らかの応答responseを得ようとするかぎり、その自己は相手に何らかの自発性を認めそれを触発するように努めているはずなのである。それゆえコミュニケーションを直接性の関係から一元的に把握することもできるだろう。しかし、最初に指摘したようにここで示したのは道具であって世界観ではない（もっとも世界観も一つの道具として利用できないわけではない）。こうした直接性を中心とする関係は恋愛以外にも少なからず認められる。しかも、それぞれが独自の仕方では直接性を利用exploitしているように見えるのである⁽¹⁷⁾。直接性を考慮することでこうした関係の独特な構成を把握可能にする。

例えば、嘘をつくにはこうした直接性が必要であるように見える。嘘をついている方は、自分が嘘をついているのを相手が気づいていないと把握できなければいけないが、そのことはもちろん相手に確認できない。また、嘘をつかれている方もこのことを相手に確認することなく気づけるからこそ、逆に嘘をついた側を騙すことができる⁽¹⁸⁾。こうして我々の周囲にあるさまざまな相互関係の作り方をふりかえってみるためにこの道具を使うことができる。それは日々我々が他者をどのように扱っているかあるいは扱うのかという問いかけを突きつけずにはおかない。観察を通じて我々は日々の実践を問い直し俎上に載せる可能性を手に入れることになる。図式は実践のための道具なのである。しかも、近代社会が「内面性」に焦点を当てることで出来上がった社会だとするなら、こうした分析は個別的事例を明らかにするにとどまらない射程を期待できるはずである。

《注》

- (1) [西阪1988]は規則に必要な公準を三つ提示して会話分析の諸規則の妥当性を確認している。①行為者自身の経験のうちに現れるものであること、②文脈から独立していること、③相互的やりとり上の戦略的資源になること。私はここで提示する図式もこれらの公準を満たすものになっていると考える。むしろ、会話分析では観察ということを曖昧に扱っているためしばしば分析内容の位置づけが不明瞭なものになっているように見受けられる。

- (2) サールの理論そのものについては[芦川 1995b]で分析を試みた。
- (3) 他方、発語内行為、例えば約束するか/しないかは意図に基づく選択可能なものとして扱われている。しかし、発語内行為を遂行する上で必ずしも任意に相手を選択できるわけではない。さらに行為する場面に限定して考えると「約束する」行為はあっても「約束しない」行為は有り得ないことも分かる。「約束しない状況」は「約束する状況」を想定しないと生じないからである。そして、もちろん受け手は「約束する/しない」を選択できるとみなされる。この非対称性は、発語内行為の遂行がしばしば愛と類似した状況を招くことを意味する。例えば、言い出しっぺが損をする。
- (4) もっともこうした二人だけの関係を個別に複数作ことは理屈の上では不可能ではない。しかし、個別的な関係の複数性は二人の関係を脅かすものとして扱われている。
- (5) こうした非対称性はしばしば愛する側を男として愛される側を女として表象してきたと推察される。これは少し形を変えて男の愛の非継続性/女の愛の継続性としても表象されている。そうした表象は現在崩れつつあるがそれでもその名残を見いだすことは難しくない。またそれは既成の社会関係の中に男/女を埋め込む形式として利用されていることも見逃せない。
- (6) 英語のloveもknow、liveと同じように状態を表す動詞として基本的に進行形で使うことができない。その意味合いが「愛する」よりは「愛してる」であることがうかがわれる。
- (7) またこうした受動性は、しばしば誰かを好きであることが「相手が自分のことを好きなのではないか」という形で表象されること、あるいはサルトルが愛することを「愛されたい」ということから説明していくのに符合する。もっとも愛するフリができる以上愛や感情は決して「内なる思い」として通用しているのではない。
- (8) このような接続能力から発語内行為を考えるかぎり、実際の会話の中で発語内行為と発語媒介行為を厳密に区別することはできなくなる。実際に相手から応答を引き出すことは発語媒介行為であると考えられるからである。
- (9) とするなら、発語内行為の成立はルーマンに従うと権力メディアを利用していることになるのかという疑念が生じる。権力は複数の選択肢を指示しておいてその中の特定の選択肢しか選択できないように複雑性を縮減する。しかし、発語内行為において指示される選択肢のいずれかを選ぶべきかは常に指示されるとは限らない。ところが、相手に尋ねられて返事をするとはしばしば幼年時から強要されるものである。また適切な応答を返せないことはとりわけフォーマルな場面では種々の問題を引き起こす。とするなら「返事をする/しない」という選択図式の選択関係においては権力が働いていることになる。もっともこうした強制（規範）はほとんど意識されることがない。
- (10) これをヘーゲルの主と奴の弁証法がベースにしたサルトルの議論を利用して違った視点から説明すると次のようになる[Sartre 1943:訳316-]。自己は他者のまなざしによって対自的に存在する。つまり、他者は自己を定立し所有しているのだがその自己が存在する責任は自己にある。自己が自己自身によって立つためには他者の自己を定立する自由を自己のものにする必要がある。だが、他人のそうした自由をそのまま奪ったのでは自己自身が消滅してしまう。だから、他者の他者性を維持したまま相手の自由を自己のものにしなければならない。つまり他者に自己以外を選びとれないように自己を定立させればよい。それを可能にするのが愛であり、相手を誘惑することである。
- (11) こうした関係の非対称性から愛において優位な立場は、愛される側にあることが分かる。行為する側はそれが相手の体験へと接続されるように、行為するしかないのに相手にはそれを選択する権利が与えられているからだ。だから、恋愛において優位な立場にたつためには、極力自分が選択できる立場に立つようにしむけることが有効である。つまり、基本は相手の行為を自己の体験へと接

続させないように、少なくとも接続を相手に把握させないように行為できること、なおかつそうした行為が直接相手の体験に接続されるようにしむけることになる。もっともこうした関係は相手が過大な複雑性を抱え込むことになるから関係を非常に不安定なものにしてしまうかもしれない。そこで、たまには相手の行為を自己の体験へと接続させてやり、こうした複雑性を縮減してやる必要がある。

- (12) こうした不安定な親密な関係を安定的なものに変えていくためには、この関係を他の関係に結びつけて公共的なものにしていけばよい。近代にあって親密な関係はそれに固有の持続するシステムを分化させなかったが結婚・家族と結びついた。つまり、愛の帰着先は結婚であり、婚姻関係・家族関係の維持が愛の実践として表象されたのである[Luhmann 1982:Chap.14]。他方、愛と結婚の結びつきで家族関係の他の機能が隠蔽されることとなったのはフェミニズム等から指摘されるところである。
- (13) ルーマンによると親密な関係では伝達と情報の差異が効力を失う。つまり、コミュニケーションによって知らせようと意図したこと以外のことまでが意味されてしまう。「恋愛主体たるわたしには、目新しいもの、心乱すものは、すべて、事実としてではなく、解釈を下すべき記号として受けとれるのだ」[Barthe 1977:訳94]。人と人との相互浸透はコミュニケーションの可能性を越えて行われているのである。[Luhmann 1984:310=361]、[Luhmann 1982:220=175-]。
- (14) [Luhmann 1982:35=30.43=36-]。こうして関係の問い返し再帰化が続けられていけば行くほど、互いの関係を作るために持続的に利用できるものは限られてくる。社会的地位、財産、婚姻関係等々はもちろん、性的な関係に至るまで。ギデンスは現代にあっては親密な関係を維持していく上でますます関係以外の要素に依存できなくなっていると指摘し、「関係が互いにもたらすもの」だけを追求するpure relationshipが出てきた述べている[Giddens 1991:88-]。もっとも親密な関係を一時的なものにせず維持していくことは親密な関係の成立にとって必然的な要素ではない。
- (15) 例えば[橋爪 1995:96-]、[Collins 1982]。またカントが結婚を二人の人格による性器・生殖能力の占有的使用契約として位置づけたことはよく知られている。
- (16) [Luhmann 1995:189-203]ではこの発語内行為/発語媒介行為の区別に類比的なコミュニケーション/知覚の区別について論じている。
- (17) 「直接性」はカリスマ、差別、精神分析（とりわけ転移）、友情、癒し・ケアの問題などを考える上で有効だと思われる。また、[山崎 1994:170-]の容貌の評価をめぐるやりとりの解釈は、直接性の関係の事例として理解できる。差別については[山崎 1994]の書評中の注で簡単な見解を述べておいた（『ソシオロジカル・ペーパーズ』4掲載）。
- (18) [Goffman 1974:Chap.6]の再封じ込めrecontainmentの議論を参照。また、ゴフマンが「焦点の定まらない相互作用unfocused interaction」として取り上げた問題は関係の直接性を考える上で極めて示唆的である[Goffman 1963]。

〈参考文献〉

- 天野義智 1992『蕨の中のユートピアー情報資本主義の精神環境論ー』弘文堂。
- Austin, J. L. 1962 *How to Do Things with Words*. Oxford U. P. 坂本百大(訳)『言語と行為』大修館書店 1978。
- 芦川 晋 1995a「発語行為の理論とは何か、また何であるべきか」『社会学年誌』36:67-80。
- 芦川 晋 1995b「J.R.サールのコミュニケーション的発語行為の理論」『ソシオロジカル・ペーパーズ』

- Barthe, R. 1977 *Fragments d'un discours amoureux*. Seuil. 三好郁朗(訳)『恋愛のディスコース・断章』みすず書房 1980.
- Collins, R. 1982 *Sociological Insight :An Introduction to Unobvious Sociology*. Oxford U.P. 井上俊・磯部卓三(訳)『脱常識の社会学－社会の読み方入門－』岩波書店 1992.
- Giddens, A. 1991 *Modernity and Self-Identity :Self and Society in the Late Modern Age*. Stanford U.P.
- Giddens, A. 1992 *The Transformation of Intimacy :Sexuality, Love and Eroticism in Modern Societies*. Polity. 松尾精文・松川昭子(訳)『親密性の変容』而立書房 1995.
- Goffman, E. 1963 *Behavior in Public Places*. Free Press. 丸木恵祐・本名信行(訳)『集まりの構造』誠信書房 1980.
- Goffman, E. 1974 *Frame Analysis*. Harper & Row.
- 草柳千早 1991「恋愛と社会組織－親密化の技法と経験－」安川一(編)『ゴフマン世界の再構成－現在の技法と秩序－』世界思想社 pp.129-156.
- 橋爪大三郎 1995『性愛論』岩波書店.
- 加藤尚武 1993『ヘーゲルの「法」の哲学』青土社.
- Luhmann, N. 1982 *Liebe als Passion::Zur Codierung von Intimität*. Suhrkamp. J.Gains & D.L.Jones(trans) *Love as Passion :The Codification of Intimacy*. Polity 1986.
- Luhmann, N. 1984 *Soziale Systeme :Grundriß einer allgemeinen Theorie*. Suhrkamp. 佐藤勉(監訳)『社会システム理論(上)』恒星社厚生閣 1993.
- Luhmann, N. 1995 "Wahrnehmung und Kommunikation sexueller Interessen", in *Soziologische Aufklärung 6 :Die Soziologie und der Mensch*. Westdeutscher Verlag. pp.189-203.
- 森本浩一 1987「恋愛のディスコース」『現代思想』15-1:86-93.
- 村中知子 1994「愛のシステムの論理と可能性」佐藤康邦・中岡成文・中野敏雄(編)『システムと共同性』昭和堂 pp.226-244.
- 西阪 仰 1988「行為出来事の相互行為的構成」『社会学評論』39-2(154):102-118.
- 大澤真幸 1993「愛と信」『現代思想』21-4-6:38-44.231-239.
- 大澤真幸 1995「貨幣の可能性と愛の不可能性」『現代思想』23-9:188-218.
- Sartre, J. P. 1943 *L'être et le néant*. Gallimard. 松浪信三郎(訳)『存在と無Ⅱ』人文書院 1958.
- Searle, J. R. 1969 *Speech Acts :An Essay in the Philosophy of Language*. Cambridge U. P. 坂本百大・土屋俊(訳)『言語行為』勁草書房 1986.
- Searle, J. R. 1979 *Expression and Meaning :Studies in the Theory of Speech Acts*. Cambridge U. P.
- 立岩真也 1991「愛について－近代家族論・1－」『ソシオロギス』15:35-52.
- 立川健二 1991『誘惑論』新曜社.
- 土場 学 1993「愛というメディア－社会変動のゼマンティーク－」『社会学評論』44:314-329.
- 山田昌弘 1994『近代家族のゆくえ－家族と愛情とバラドックス－』新曜社.
- 山崎敬一 1994『美貌の陥穽』ハーベスト社.
- Wittgenstein, L. 1969 *On Certainty*. Blackwell. 黒田亘(訳)『確実性の問題』(ウイトゲンシュタイン全集9) 大修館書店 1975.